

人・ひのきしん 生・記

「清掃」 その②



教会周辺の雪かきに励む遠藤さん。春の到来とともに、公園内の草引きを始める（弘前市内で）

心「清む」 感謝のひと時

辺り一面、銀世界の青森県弘前市。春にはサクラ見物の客でにぎわう弘前公園も、いまは雪ですっぽりと覆われている。

遠藤広（76歳・禰宜町分教会教人）は、雪解けが始まるころを見計らって、公園内の草引きにかかる。

早朝6時から約1時間。このひのきしんは、遠藤にとって、春から秋にかけて恒例の作業となっている。

発端は20年前、胆石を患い、検査を含めて4カ月間に及んだ入院生活中の出来事。医師から複数の内臓疾患の疑いを告げられ、「ひょっとすると、自分の人生は、もう長くないのでは……」と、死への不安が頭をよぎったことにある。

長年にわたって、所属教会の朝の神殿掃除を続けるなど、お道の御用に心を尽くしてきた。

「病院のベッドでお道の本を読みながら、いろいろと思案してね。親神様・教祖に、もっとお喜びいただけることをしようと考えた」

以来、入院患者に声をかけては、おさづけを取り次ぎ、神様の話をして回る日々。退院後もにをいがけに歩いた。

「でも、気持ちが晴れず、どうしてもインターホンを押す気分になれない日もあった。そんなことでは神様に申し訳ないと思って……」

そこで始めたのが、公園内の草引きだった。最初は「にをいがけの代わりにつもりだった」が、そのうちに「早朝のひのきしんと夕方のにをいがけが、セットになって日常生活に定着していった」という。

「ひのきしんをしていると、気持ちが晴れて、にをいがけへ出かける力が漲ってくる」

それから20年。会社を定年退職してからは、教会の神殿掃除と公園の草引き、にをいがけに一層熱心に取り組んだ。そして冬の間は、教会や自宅周辺の雪かきにいそむ。

早朝ひのきしんの様子は多くの人の目に留まり、平成13年には、地元の社団法人から表彰を受け、その2年後には地元紙で紹介された。

公園では、さまざまな人との出会いがある。

「ボランティアですか？」との問いに「生かされていることへの感謝を、行いに表すひのきしんというものです」と、お道の話をしたことは数知れない。なかには、身の上話に花が咲き、身上者と分かって、おさづけを取り次いだこともある。

「20年前、一度は長くないと思った命だが、いまでも元気に生かしていただいている。だから、私の心の中では毎日が『一日生涯』。明日は、どうなるか分からないからね」
『今日一日』のひのきしんを積み重ねて、21年目の春が間もなく巡ってくる。